

小規模で個別指導が可能な英語クリニック

専任講師 スーザン・アダムズ・ヤマダ

はじめに

大学の英語教育の現場において従来から一般的に採用されてきた形式の授業に対して、学生が抱く期待値や満足度は低い水準に留まる一方で、本学の学生の多くが通常の授業以外にも英語に触れたり英語で意思の疎通をはかったりすることができる機会を求めている。

履修科目として学ぶだけでなく、学生がもっと英語を使うことができる機会を提供するための試みとして、今年度は「イングリッシュ・クリニック」を開設した。レッスンは少人数または個人単位で行われる。対象は学部または短大に属する学生で、英語を学ぶことに対して興味と意欲があれば誰でも参加できるようにした。

イングリッシュ・クリニックとは

「イングリッシュ・クリニック」という名称から、学生の発音や文法の誤りを指摘して正す場を連想するかもしれないが、それは我々が目指しているものとは違う。英語への関心が高い学生が参加し、自ら「英語恐怖症」を克服し、より自由に英語でコミュニケーションを行える場にしたいと考えている。実際に、英語恐怖症を「治す」ために参加した学生の多くが、教科として履修している英語の授業だけに留まらずに英語をもっと積極的に学びたいと考えるようになった。その結果、従来から履修している英語の授業での学習態度も向上するなど、参加した学生たちにポジティブな影響が見受けられた。つまり、三者——クリニックに参加した学生、英語の授業でともに学ぶクラスメイト、教員——にメリットをもたらす状況である。

第一に、「イングリッシュ・クリニック」は授業ではないため、学生にとって魅力的な学びの場である。通常の授業とは異なり、参加はあくまでも任意であるし、教員から成績の評価を示されるわけでもない。また、セッションごとの参加は数人に限定されている。このように小規模の「イングリッシュ・クリニック」を提供することで、通常の授業ではなかなか実現できないような話しやすい状況を作り出すことが可能になる。このことにより、学生は学習意欲が高まるような環境で英語のスキルを向上させることができる。前述のとおり、教員が主体で進める学生数の多い従来型の授業形式は、英語に対する学生の興味と学習意欲を減退させてしまう傾向があり、実際に相当数の学生がそのような経験を持っている。だが、1名から最大5名という少人数による学習の場を創出すれば、学生が非魅力的だと感じてしまうような環境からは離れ、それとは性質が異なる学習機会を提供することができる。

3つの利点

- (1) ニーズに合わせたレッスン内容

小規模のグループで「イングリッシュ・クリニック」を実施することの利点の 1 つは、レッスンの内容をクラスのニーズに合わせて柔軟に組むことができる点である。教科として学生が履修する通常の授業は、概して教員があらかじめ計画・準備したカリキュラムに従って進められるが、「イングリッシュ・クリニック」では 6 週のセッションで何を扱うかは参加者である学生が主体となって決める。したがって、第 1 回目のセッションでは、参加者の目的や目標について話し合いながら 6 週のスケジュールを共同で作成し、各人が採用を希望するトピックを網羅できるようにする。今年度の参加者について言えば、彼らの目的はいくつかの文法に特化した練習、特定の状況を想定した会話の練習、ディスカッションの練習、STEP 試験のための個別指導など、多岐にわたっていた。このように、学ぶ内容を自分自身で決めることによって、学生はセッションの内容を把握しているという実感を得ることができ、自分がやるべきことを主体的に考えるようになる。

(2) 実践にともなう学習意欲の向上

2~5 人という少人数で「イングリッシュ・クリニック」を行う利点の 2 つめは、30 分のセッションのあいだに教員やほかの参加者と英語で話す機会が多いことである。通常の授業では履修学生が 20 人ほどいるため、80 分の授業時間中に 1 人の学生が話す機会は 1 回ないしは 2 回程度になってしまう。だがクリニックでは、クラスには自分以外に数人しかいないという環境にあるため、他の学生の陰に隠れて沈黙していることはできない。したがって、毎回たくさん話すうちに、人前で英語を使うことに対して緊張しないようになる。さらに、英語表現に誤りなどがあれば、その場ですぐに教員から丁寧な指導を受けられるし、ほかの参加者からもフィードバックを得ることができる。このように充実したフィードバックを得ることによって、学生が英語のスキルを上達させ、自信を持って安心して英語を話せるようになり、学習意欲が高まっていくというのが理想的である。

(3) コミュニケーション力の向上

小規模のグループという形式を採用することによって得られる第 3 の利点は、ほかの参加者とコミュニケーションを持つ機会が多くあるために、教員および自分とは異なる専攻の学生との間で新たな人間関係を築くことができる点だ。同じ専攻の友人どうしで一緒にクリニックに申し込んだケースがあったのも事実だが、そのような学生たちもセッションを重ねるうちに、専攻は違っても志を共有する仲間とも同じように親しく話すようになった。今年度は、ピアノ、バレエ、アート・マネジメント、ホルン、作曲、ミュージカル、音楽療法を専攻する学生がクリニックに参加した。異分野の学生と交流するという経験自体が学生の英語上達において有形の効果を与えるかどうかは別として、以前は面識がなかった学生と交流することによって自信がつき、異文化の人々と英語で話す場面に遭遇したときも自分は堂々と対応できるだろうと、前向きに考えることができるようになる。

スケジュールの工夫

最後に、小規模のグループをベースとして「イングリッシュ・クリニック」を展開していくうえでの利点をもう 1 つ挙げておきたい。それは、クリニックへの参加を希望する学

生に対して、最大限にその機会を提供することが可能な仕組みがあるという点だ。1人でも多くの学生がクリニックを利用することができるようにするために、6週にわたるクリニックの実施期間を通して、1つのセッションにつき30分の枠を確保し、これを年間4回行うことにした。各レッスンは、図書館内にある2つのセミナー室を利用して行っている。学生は1週間に1回（毎回同一の枠）、30分のセッションに参加する。6週間のセッションが始まる前に1週間の申込期間を設けているので、新規または継続を希望する学生はこの期間を利用してクリニックへの参加を申し出ることになっている。今年度の前期に初めて実施したクリニック（6週）においては、学生は主に火曜日と木曜日に設定された11枠のなかから参加したいセッションを選ぶことができた。それ以外に今年度開催した3回のクリニック（同じく6週）においては、1週につき8つの枠（火曜日と木曜日に均等に設置）から選択することができた。当然のことながら、「イングリッシュ・クリニック」に興味があっても、授業スケジュールとの兼ね合いで都合がつかず、参加できなかった学生もいた。それでも、2013年度は合計で210のセッションを提供し、学部と短大をあわせて47人の学生が参加した。これほど多数のセッションが開催されたことに対して、驚きと喜びを感じている。この数字は、小規模のクラスだからこそ達成できたのである。より規模の大きなクラスを対象とする教室の数には限りがあるため、もしこれらの教室を使用しなければならなかったとしたら、これほど多くのセッションを提供することはできなかっただろう。

まとめ

初の試みとして実施した今年度の「イングリッシュ・クリニック」について総括すると、我々は掲げた目標を達成できたと言っても過言ではないだろう。英語に関心を持っていた相当数の学生に対して、英語でコミュニケーションを行なう機会を新たに提供することができた。特に、10~15人のコアな学生について言えば、クリニックで学んだことによって、それまで感じていた英語に対する不安感をかなり払拭することができたようである。同時に、英語学習に意欲的に取り組む新たなきっかけが与えられ、残りの学生生活において英語がどのように役立つかについて、彼らは真剣に考え始めたようである。

筆者の個人的な感想を述べるならば、参加した学生たちの言動から今年度の「イングリッシュ・クリニック」は成功であったと感じた。最後のセッションが終わってから2週間後、2人の学生が個別に訪ねてきて、「今年度のセッションは完全に終了してしまったかどうか」を筆者に確認した。2人とも「イングリッシュ・クリニック」がとても楽しかったので、あと何回か参加できるのではないかと期待していたのだという。教員にとって、これ以上の賛辞はない。

参考文献

- ・ Dornyci, Z: *Motivational Strategies in the Language Classroom*, Cambridge University Press, UK. 2001.
- ・ Jaques, D: *Learning in Groups*, (2nd ed) Kogan Page, London. 1991.